

第V章 日向国分寺跡出土軒先瓦の分類

第1節. 日向国分寺古瓦の研究史

日向国分寺跡の古瓦については、昭和36年に宮崎県教育委員会と九州大学が調査を行った際、小田富士雄氏によって詳細な検証が行われている(小田, 1963)。氏の分類は、瓦当部の文様構成や形状、叩き手法等で軒丸瓦を8種類、軒平瓦を6種類に分類されている。また、平瓦・丸瓦を叩き文様から縄目叩文・格子目叩文・平行条線文・無文の4種類に分け、その中を細分されている。

その後、平成元年の試掘調査により出土した丸・平瓦を長津宗重氏が叩き目と凹面の布目痕の関係、また、それぞれの叩きに伴う面取りの部位について紹介し分類されている(長津, 1991)。

今回の瓦分類に関しては、軒先瓦に限定し紹介する。軒先瓦分類は、ほぼ小田氏の分類に準拠するが、その後の調査で新たに分類できるものも出土しているため再度分類を行う。

日向国分寺跡の調査は上記したように昭和23年の日向考古調査団の調査に始まり、平成12年度までに9度の調査が行われてきた。しかし、いずれも広範囲の発掘調査ではなく、主要伽藍部及び寺域の確認調査が行われたのみである。したがって、これまでの調査では一括遺物としての古瓦の出土が大変少ない。このような理由から、今回は瓦当面の文様構成や顎部形状などによりセット関係を推定することに留める。

第2節. 分類私論(図9・10)

ここでは、小田氏が昭和36年に調査された時点以降、出土瓦の量もかなり増えたことから、それらの資料を用いて細部を検証した結果、軒丸瓦を11類、軒平瓦を9類に分類し、その中を細分した。但し、大半は小田分類を踏襲する。

(軒丸瓦)

- 1類 小田氏の一類を充てるが蓮弁と珠文の配置、及び楔形小弁の変化で3種に細分する。
- 1a類 小田氏の一類とほぼ同様である。小粒の珠文が十六珠あり、ほぼ蓮弁と楔形小弁に一致している。
- 1b類 1a類では珠文と蓮弁・楔形小弁が一致していたが、少しずつずれを生じている。
- 1c類 珠文と蓮弁との関係は1b類同様であるが、楔形小弁が省略されて蓮弁を囲む外界線にて表現されている。
- 2類 小田氏の二類を充てる。
- 3類 小田氏の三類を充てるが、蓮弁の形状と内区界線の太さで3種に細分する。
- 3a類 単弁11ないし12葉である。蓮弁の小弁が線状に深く窪んでいる。中房はやや太めの圏線で表され、蓮子は1+5の6個と思われる。
- 3b類 3a類の蓮弁の小弁表現が線から割り開いた形に変わり、これに伴い蓮弁の高さは低くなる。
- 3c類 蓮弁の表現は3b類と同様であるが、中房の圏線が大変細くなり高さも低くなる。
- 4類 小田氏の四類を充てる。
- 5類 小田氏の五類を充てるが蓮弁の数と珠文の数及び配置により3種に細分する。
- 5a類 小田氏の五類を充てる。
- 5b類 5a類に近いが、蓮弁の数が8葉ほどである。

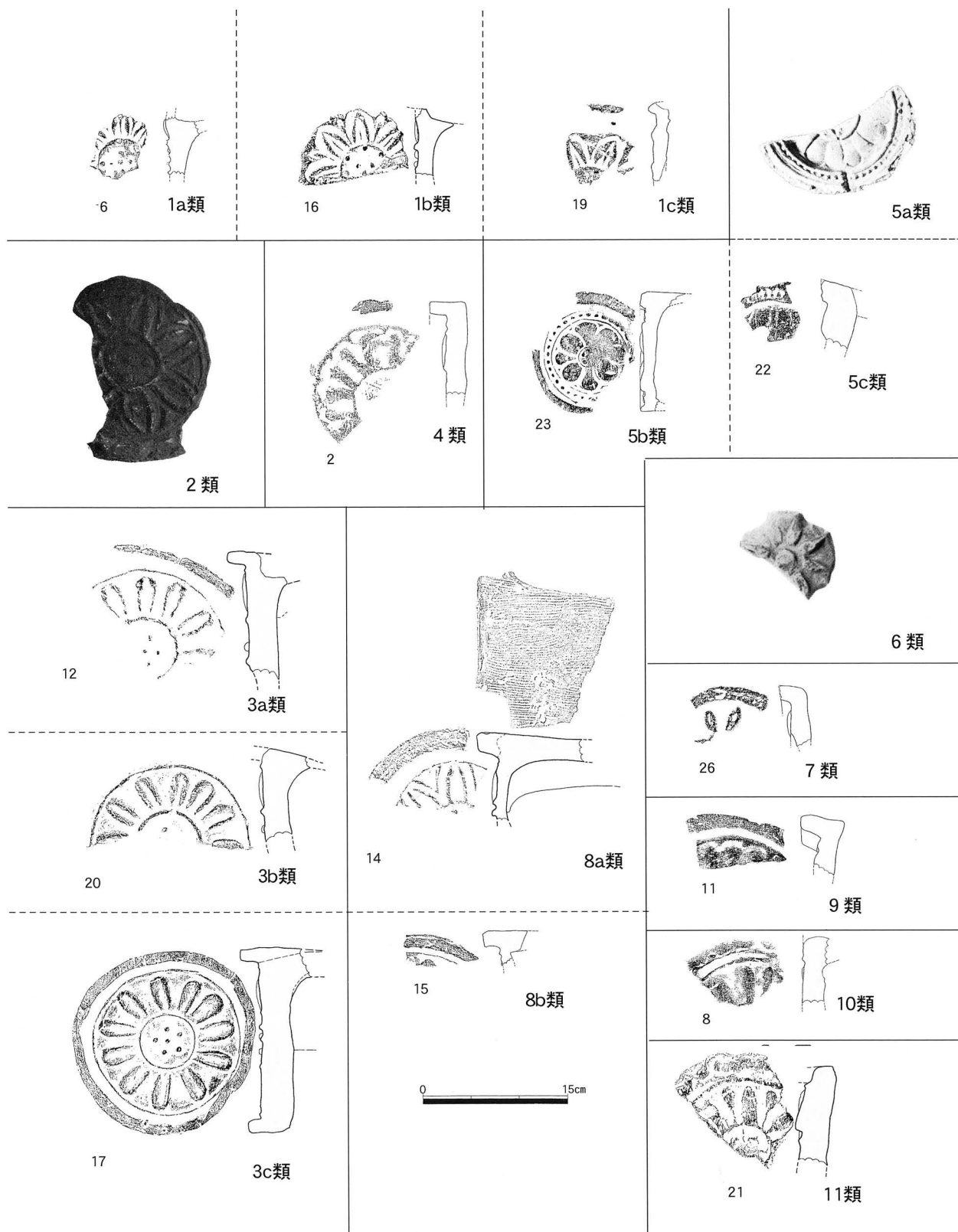


Fig. 9 日向国分寺跡出土軒丸瓦分類 (1/5)

※2・5a・6類に関しては約1/5である。

- 5c類 5a・b類同様であるが、蓮弁を線刻に表現したものに变化するため、不鮮明である。
- 6類 当初、小田氏の六類を充てていたが、出土地点が日向国分寺跡のものではないことが明らかになったことから、今回、小田氏の七類を充てる。
- 7類 小田氏の八類を充てる。
- 8a類 単弁で7・8葉である。蓮弁の表現は1c類に近似するが、外区内側の圏線内で蓮弁が収まらず、圏線で切られた様な形を採る。また、1類と大きく異なるのは珠文の省略である。
- 8b類 蓮弁の表現等は8a類同様であるが、蓮弁帯の外が素弁でかなり薄い作りである。
- 9類 蓮華文複弁と思われる。蓮弁がかなり低く摩耗しているので詳細は不明であるが、かなり蓮弁の表現が簡素化している。
- 10類 単弁で12葉程である。中房は圏線で表され蓮子は不明である。蓮弁は長く、先が丸まる。
- 11類 単弁8葉程である。弁間に子葉が配され蓮弁2つに対して1つ割り付けられる。中房には2つの蓮子が認められるが詳細は不明である。また、中房内にも界線が配され蓮子を区切っている。

(軒平瓦)

- 1類 小田氏の一類を充てるが氏の指摘でもあるように瓦当端部の面取りの有無で2種に細分する。
- 1a類 小田氏の一類を充てる。
- 1b類 小田氏も指摘されているが、瓦両側端が内傾する。この内傾しているものに関しては、桶から切ったままの状態で面取りを行ってないための所産かもしれない。
- 2類 小田氏の二類を充てるが、3種に細分する。
- 2a類 小田氏の二類を充てる。
- 2b類 2a類と比較すると瓦当下部の圏線がかなり細くなる。したがって、瓦当上下幅もかなり狭くなる。
- 2c類 2b類と近似しているが珠文が大きく、珠文の全ての配置は不明であるが大きな珠文が瓦当端に配される。図に提示したものは瓦当端を丸く面取りしているが、この類のものが全て面取りされているかは不明である。
- 3類 小田氏の三類を充てる。
- 4類 小田氏の四類を充てる。
- 5類 小田氏の五類を充てる。
- 6類 小田氏の六類を充てる。
- 7類 均整唐草文で2a類の蕨手様の相対する中心飾と子葉が一緒になり、あまり波行の強くない唐草が左右に伸びる。珠文は圏線の内側にあり中心飾の中心上部に1つを配する。その他の珠文は子葉の先に蕾状に付き、珠文としての意味をなくす。
- 8類 均整唐草文で7類と近いが、子葉の先の蕾が消え、中心飾及び子葉が瓦当面全域に拡がる。また、中心飾や子葉は7類と比較するとかなり肉太になる。
- 9類 均整唐草文と思われるが、唐草の波行がかなり弱く、一本の子葉が横に長い。子葉の先には7類同様珠文が蕾状に付く。圏線は瓦当下部にのみ痕跡を残す。

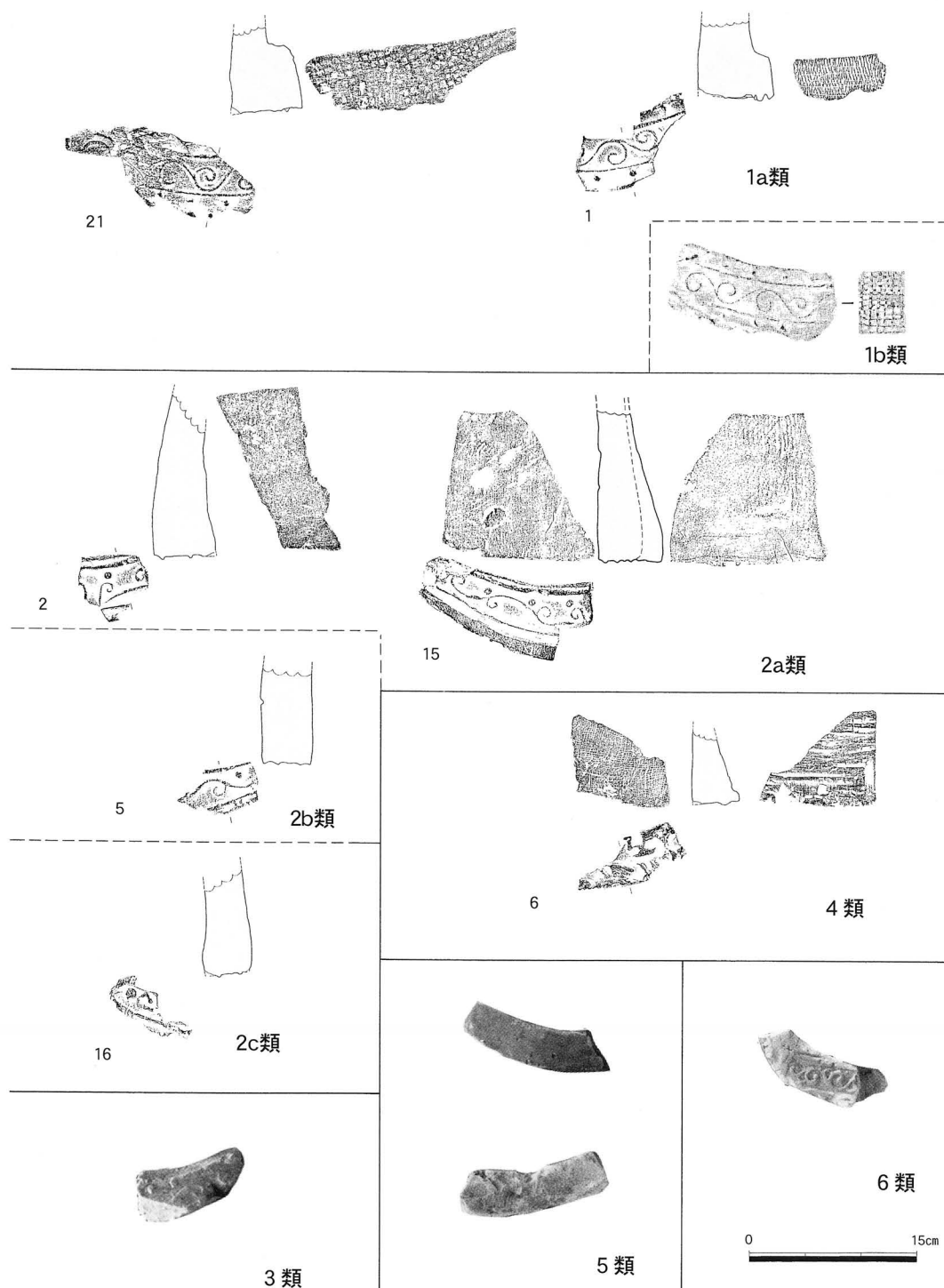


Fig. 10 日向国分寺跡出土軒平瓦分類 (1/5)

※3・5・6類に関しては約1/5である。

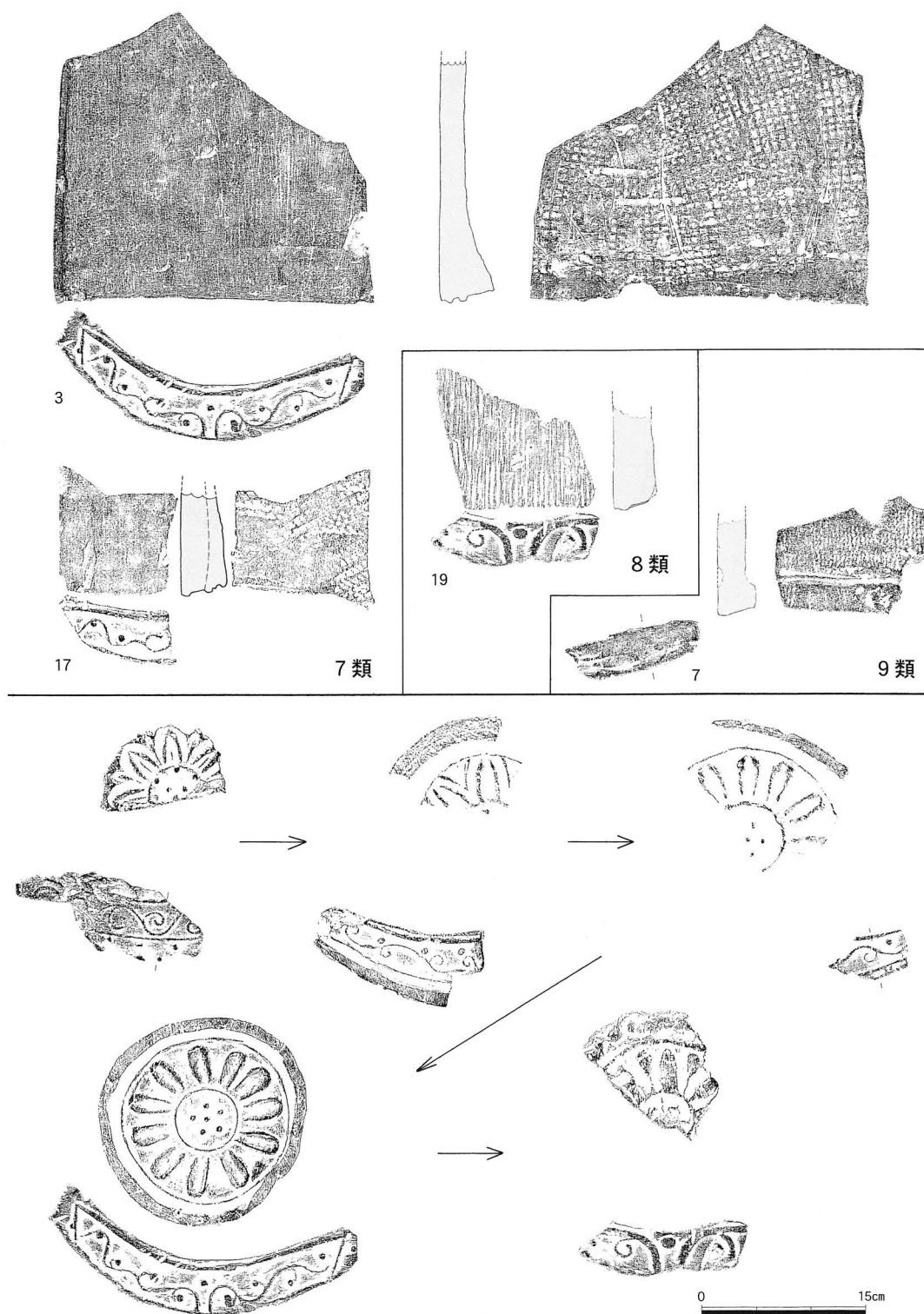


Fig. 11 日向国分寺跡出土軒先瓦のセット関係 (1/5)

第3節. 日向国分寺出土軒先瓦のセット関係(図11・12)

(創建期)軒丸瓦1a・b・c類、軒平瓦1a・b類

創建期の軒先瓦は小田氏も指摘されているように、軒丸瓦1類と軒平瓦1類がセットをなすと思われる。軒丸瓦の瓦当文様の細かな変化とは異なり、軒平瓦は1a・1b類での面取りの差がある程度ある。このセットは国分寺創建瓦と思われ8世紀後葉～末頃の時期が充てられる。

(第2期)軒丸瓦2類、5a・b類、8b類、軒平瓦5類

この時期には3類4種の軒丸瓦と1類の軒平瓦が用いられたと想定される。今回、軒丸瓦2類と軒丸瓦8b類を別類にした。これは、筆者自身が昭和36年資料を一部しか実査できなく、報告書の写真からのみの判断であることから別類にした。但し、細かな差があるとしても同類の範疇であろう。しかし、軒丸瓦5類では全く様相が異なる。小田氏は、この瓦の周縁が高くなり、小珠文の密に配されることから平安前～中頃の時期を充てられている。筆者もそれに従う。一方、軒平瓦5類に関しては小田氏が指摘されているように、瓦当部と平瓦部が直角で顎形状が深顎であることから創建期に近い時期の所産であろう。但し、無文の瓦当が突如、軒平瓦1類に取って代わるとは考えられないことから、第3期までは軒平瓦1類が何らかの変化を得るかもしれないが軒平瓦5類と併存していると想定する。このセットは国分寺第2期の瓦と思われ9c 初頭頃の時期が充てられる。

(第3期)軒丸瓦8a類、5c類、軒平瓦2a類

この時期は2類2種の軒丸瓦と1類1種の軒平瓦が用いられたと推定される。この2類2種の軒丸瓦は第2期の軒丸瓦の変化形態であると思われ、8a類は蓮弁が内区圏線内に収まらず形状的には蓮弁が圏線で切られたような配置を示す。また、5c類に関しては5b類の小珠文が周縁に移動し、蓮弁の文様が線刻されたような簡略化が認められる。一方、軒平瓦2a類は瓦当面が上面と直角から鈍角への移行期であり、顎の形状が段顎から撫顎に変わる段階である。瓦当文様は蕨手文の中心飾から左右に唐草の子葉が3つに分岐する。1類で珠文が内区の外側に配されていたのに対し、内区の内側へ移動し子葉の分岐する箇所配される。このセットは国分寺第3期の瓦と思われ9c前葉頃の時期が充てられる。

(第4期)軒丸瓦3a・b・c類、4類、軒平瓦2b・c類、7類

この時期は2類4種の軒丸瓦と2類3種の軒平瓦が用いられたと推定される。軒丸瓦は中房に5個の蓮子が配され、単弁11ないし12葉の軒丸瓦3類に代表される。また、これと同時期に複弁7葉と思われるものも採用される。この時期以前の複弁軒丸瓦は出土しておらず、今後出土するのか、それともこの時期に違うルートで導入されたのかは今後の課題である。一方、軒平瓦に関しては2a類から変化した2b・2c類が用いられるようになる。また、それらの瓦当文様に変化して珠文と子葉が一緒になり蕾状になった形へと変化する。このセットは国分寺第4期の瓦と思われ9c 中～後葉頃の時期が充てられる。

(第5期)軒丸9類、10類、11類、軒平3類、4類、8類、9類

この時期は3類の軒丸瓦と4類の軒平瓦が用いられたと推定される。軒丸瓦は3類の蓮弁がそれまでとは逆に盛り上がり素文の蓮弁となる。また、蓮弁の間には外側に向かって膨らむ形の蓮弁ともいべきものが交互に配される11類や11類がより簡素化された10類が採用される。また、4類の複弁のものがより簡素化されたと思われるものも採用される。一方、軒平瓦は9類のような子葉が扁平で左右に長く延びたものや8類のように7類に変化して瓦当全体に7類の内区の文様だけが肉太に表現されたもの、また4類のようにそれまでの文様と逆転し唐草文が刻印されたものなどが採用される。このセットは国分寺第4期の瓦と思われ9c 後葉～末頃の時期が充てられる。

	軒丸瓦	軒平瓦
創建期 8c後 ～ 8c末	6 1a類 16 1b類 19 1c類	21 1 1a類 1b類
第2期 9c初	2類 15 8b類 5a類 23 5b類	5類
第3期 9c前	14 8a類 22 5c類	15 2 2a類
第4期 9c中	12 3a類 20 3b類 4類 2	5 2b類 16 2c類 3 7類 17
第5期 9c後 ～ 9c末	17 3c類 21 11類 9類 8 10類	3類 7 9類 19 8類 6 4類

Fig. 12 日向国分寺跡軒先瓦の型式変遷 (1/10)

軒丸瓦

No.	調査年度	出土地点	分類	数量	建物との位置
1	KBZ(平成7年度)	I-A区 1トレンチ SE11	3b	1	中門構内
2		〃 2トレンチ	4	1	中門
3		〃 11トレンチ	1	1	中門
4		〃	8b	1	中門
5		I-B区 10トレンチ	3a	1	金堂東側
6		〃 2トレンチ SC2	1a	1	金堂東側土坑2内
7		〃 〃 SC2	1b	1	金堂東側土坑2内
8		〃 一括	10	1	金堂東側土坑2内
9		不明	1	2	不明
10	KBJ2(平成8年度)	II 3トレンチ	3?	1	金堂北東側
11		〃	9	1	金堂北東側
12	KBJ3(平成9年度)	A区 SE002	3a	1	主要伽藍西門構内
13		〃	3b	1	主要伽藍西門構内
14		〃	8a	2	主要伽藍西門構内
15		〃	8b	1	主要伽藍西門構内
16	KBJ5(平成11年度)	A区	1b	1	中門柱穴内
17		〃 SE002	3c	1	中門構内
18		B区 3トレンチ	3b	1	中門南東
19		C区 一括	1c	1	金堂北東側
20		〃 SR001	3b	3	金堂北東側
21		〃 SR001	11	2	金堂北東側
22		〃 SR001下層	5c	1	金堂北東側
23	KBJ6(平成12年度)	A区 1トレンチ	5b	1	中門
24	KBJ(6)(平成12年度に表採)	中間一括	1	1	中門付近
25		〃	1b	1	中門付近
26		〃	7	1	中門付近

軒平瓦

No.	調査年度	出土地点	分類	数量	建物との位置
1	平成7年度以前の表採	No.57	1a	1	表採
2	KBZ(平成7年度)	SE-1	2a	1	不明
3		I-A区 1トレンチ SE11	7	1	中門構内
4		I-B区 2トレンチ SC2	2a	1	金堂東側土坑2内
5		〃	2b	1	金堂東側土坑2内
6		〃	4	1	金堂東側土坑2内
7		I-C区 2トレンチ SC2	9	1	主要伽藍南東隅構内
8		I-D区 1トレンチ SC2	1a	1	北西土壇南側
9		一括	4	1	不明
10		不明	2a	1	不明
11	KBJ2(平成8年度)	不明	1	1	不明
12	KBJ4(平成10年度)	A区	1a	1	回廊南東
13		一括	1a	1	不明
14	KBJ5(平成11年度)	A区 No.902	1a	1	中門構内
15		B区 3トレンチ SE001	2a	1	中門南東
16		C区 1トレンチ	2b	1	金堂北東
17		〃 SE003	7	1	金堂北東
18		〃 SR001	1a	1	金堂北東
19		〃	8	1	金堂北東
20	KBJ6(平成12年度)	A区 1トレンチ	1a	1	中門
21	KBJ(6)(平成12年度に表採)	中門付近一括	1a	2	中門

※この表は、昭和36年調査時（九州大学・宮崎県教委）出土遺物に関しては含まない。また、現時点で西都市所有分のみである。No.は図の番号と一致する。

Tab. 1 日向国分寺跡出土軒先瓦出土箇所一覧

第4節. まとめと今後の課題

今年度までの調査結果を踏まえ、今回、日向国分寺跡出土の軒先瓦の分類及び編年作業を行った。但し、今回の分類及び編年は、あくまでも試案であり、今後の調査成果で大幅に追加及び修正される可能性があることを断っておきたい。

分類を行った結果、軒丸瓦を11類18種、軒平瓦を9類12種に分類することが可能であった。分類の手段は基本的には瓦当文様を重視し、製作技法や法量を用いて検討した。種に関しては、工人の癖等が反映している可能性も残るため、どこまでの細分が必要なのかに関しては疑問も残るが、今回は細かく細分を行った。

次に時期比定に関しては、国分寺建立の詔以降、『続日本紀』に天平勝宝元(756)年に日向が表されるまでの約15年間の間に1期を充て、軒丸瓦8類が9世紀中～後期頃の土師器と共伴する例が多いことから第4期に想定したが、他のものに関しては瓦当文様や法量などから年代を与えている。今回、用いた資料の中には一括遺物のみでなく表採等も含まれることから、今後、時期を確定するには資料の増加や広範囲の発掘調査を行っていく中でまとまった資料を抽出し、再度検討していかなければならない。

それ以外の課題としては、瓦の製作技法及び時期比定などを再度検討する必要がある。今回、丸・平瓦を整理するに伴い、桶巻き作りで製作したものを裁断した後に、整形台で叩き直しを施したと思われるような例もある。また、平瓦一枚作りにより製作されたと予想される瓦も含まれており、今後、これら瓦の詳細な検証を行っていかなければならない。

また、日向国分寺創建期の瓦がどのような背景及びルートを辿って持ち込まれたのかという課題もある。小田富士雄氏は昭和36年の調査報告で、筑後から肥後、そして日向への軒先瓦の導入を想定されている。軒丸瓦が単弁であること、創建期に軒平瓦に見られる偏行唐草文やその後の均整唐草文などから推察しても、このルートの可能性は高い。但し、少量ではあるが複弁の軒丸瓦も出土していることから、他地域との比較や今後の調査による資料の増加でより明確になることと思われる。

また、日向地方には古代瓦窯が佐土原町の下村瓦窯でしか確認されておらず、今後、日向国分寺瓦専業窯を確認することは必要不可欠である。下村窯跡は一部の窯しか調査されていないが、日向国分寺の瓦が直線で約8.4km離れた下村窯跡からの供給のみとは想定し難い。また、下村窯跡で出土している瓦は、ほとんどが凸面横粗縄目叩きであり、国分寺創建瓦の凸面に精縄目叩きや格子目叩きが施されたタイプは現段階までに出土していない。したがって、今後、国分寺跡周辺に創建期の窯跡が確認されることが想定される。

今後、このような課題を解決していくことにより、日向国分寺使用瓦や瓦工人集団の全貌が明らかになっていくことであろう。

※参考文献は第Ⅱ章(註)を参照